追悼の言葉

珈琲を熱くして

加賀美　子　麓

僕には僕の知っている飯島國男さんしか語れない。彼は人中に出すとなかなかの論客らしいが僕と一杯の珈琲を前に置いて嬉しそうに笑いながらしゃべっている彼は、適当に相手にしゃべらせて気のきいた相槌を打つ、という誠に平和でさわやかな人となりだ。

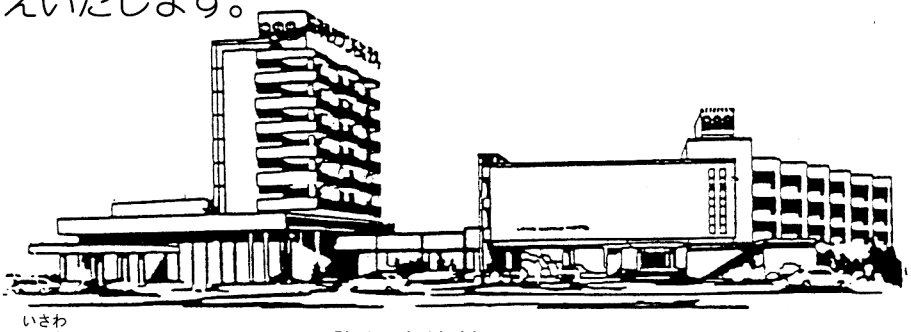
だが県民文化ホール建設のときは別人だった。知事、部長、それから設計会社と居並ぶ一統の前で原案の青写真を前に据え手弁当で全国の名うての新ホールという新ホールを余すなく視察調査したデーターを片手に、オーケストピットの幅は、深みは、反響板の残響時間は、舞台の壁面は、客席サイドの壁面の音響効果とその変化は、という具合に専門的な用語を用いた質問が矢のようにとび出して応接のいとまもない有様だった。顔は引きしまってきびしく普段のゼントルマンフェースは消え去っていた。このように自分の専門分野に入ってあくなく探求的であるのは立派で、あゝ良い男だな、と感じたのを忘れない。

この文化ホールの場合、ひらけゴマ、と行政の厚い扉を叩いたのは僕だが創造の一鑿一鑿は彼であったと云っても過言ではない。

この頃文化ホールの階段をのぼりながら、この手すりの曲り具合も窓のとり方も一緒に相談したものだったなと、彼を偲ぶことも一再ではないのである。

山梨芸術家協会というのを三年ほど前につくって県下の芸術関係の実際家ばかり七十余名がその傘下に集まったが、趣旨と云えるほどのものは掲げず、只芸術という目的を一つにする者が集まるだけのこと、そこでビール一杯もよしモカの苦いのもよし番茶の熱いのもよしと共通の言葉でしゃべれること裸でつき会える事の愉しさだけに作った会だが、そいつは面白い、是非作ろうよと一膝前へのり出したのが飯島さんでそれから会うたびにまだかまだかと慌てた感じだったが、

ご宿泊・ご婚礼・大小パーティーまで石和グランドホテルは真心こめたおもてなしと暖かい人情でお迎えいたします。



山梨・石和(いさわ)温泉　政府登録国際観光旅館

石和グランドホテル

☎0552-62-2211(大代)

FAX 62-2218〈〒406〉山梨県東八代郡石和町窪中島977

因縁話ふうに考えると、己れの死の運命を予知して一日も早く自分もその座の一つに坐りたかったんじゃなかろうかと思われもする。

この協会の発足パーティには出席出来ず、丁度その頃は何度目かの入院中に当る。

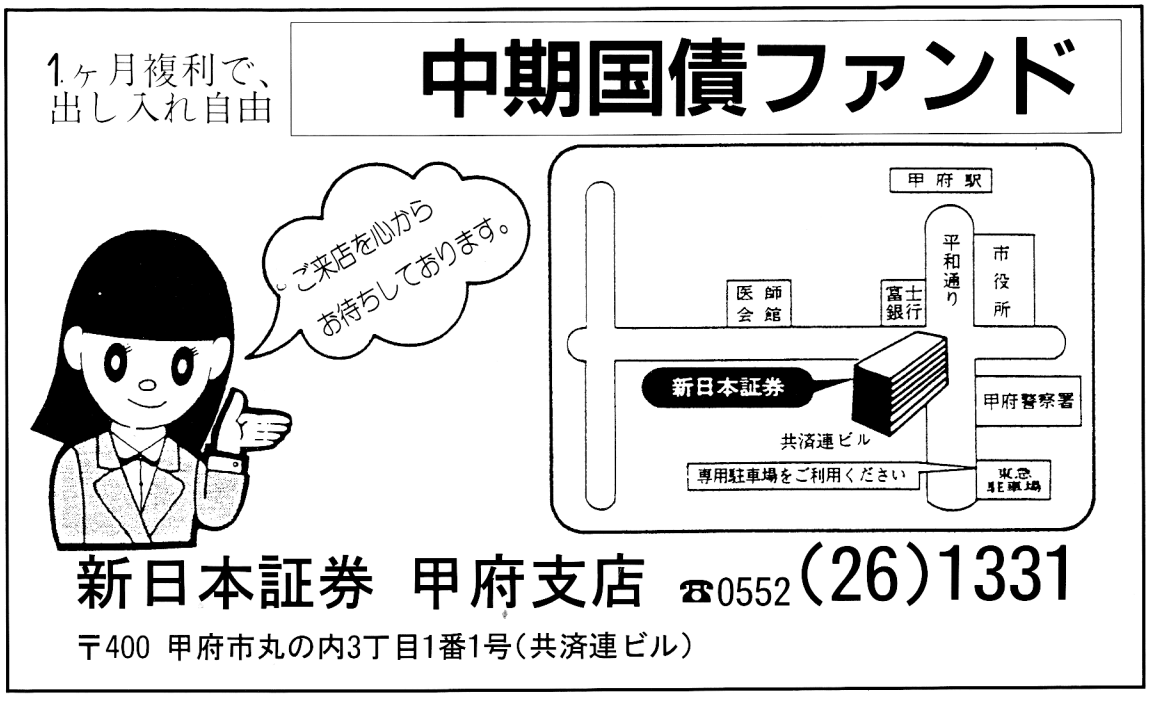
こんな変なもの胸に埋込んで、人生の御荷物は重いよ、なんて嘆きながらそれでも再起の意志ははっきりと見せていた。私は共に同じような病気持ち、変な所で気なんか合わない方が良いんだが。

いのちなんてどうせ神様の自由にするもので僕たちのものじゃないから、まあ御委せでどんと行こうよ。そんな事云いながら少しゆがめて笑っていた白い顔が忘れられない。

完璧主義の飯島さん

甲府ロータリークラブ
横　山　益　造

飯島さんと私は、昭和45年頃に甲府ロータリークラブへ入会し、その間20年から籍を置いて参りました。音楽に生き、ロータリーで奉仕を尽す中で人生を楽しんで来られました飯島さんには数々のエピソードや思い出があります。元より何事にも情熱をもって真面目に取組むお人柄でロータリーの「手続き要覧」にも良く目を通し、クラブ協議会には必ず建設的な意見を述べられる等、クラブに対する熱意はクラブの要人として認められ、会長にも就任致しました。クラブ会長時代の毎例会の挨拶にはその時々の話題にロータリーの奉仕の心をからませ、資料を集め、毎週立派なご挨拶をされ如何にも飯島さんらしいお話しの仕方でした。その中の甲府空襲の記録や資料に基づきお話しされたのは特に印象的でした。後日、ご自分の会長あいさつを中心に「小さな爪あと」と云う本を発刊され記録されたのも他の人には出来ない事でした。その折、本の表紙に私の母に墨絵にて「おたまじゃくし」の絵を画いて下さいと云われ載せられた事も今は思い出となっ



ております。

心臓に不整脈があり何かと身体を気遣う中ロータリーの地区大会にミュージカル「世界は一つ」と題しての演出、指導をされ毎晩の様に夜おそく迄その運営に疲れ切った飯島さんの言葉を聞き、そしてその事を思う時かなり無理をされた事を感じます。しかしそれを成し遂げた時の喜びも知っています。

平成元年、地区副幹事と地区ロータリーの友雑誌委員をお受けになりました時、身体の調子も思わしくなく、いよいよ新年度のその役目に就こうと云う間際入院され、ペースメーカーを付けられました。退院され間もなくもっと安静が必要な時、ロータリー友の委員会第一回の会合があり責任感のある飯島さんは、東京に行かれました。帰って来て身体の具合を悪くされた様で今思うのに退院直後でありもっと医院も我々廻りの人々も注意してあげるべきだったと悔やまれます。

その後は再入院や自宅に伏し乍らも身体の調子を考え乍ら地区副幹事の役目そして地区月信に心を寄せられ毎月の報告を出されておりました。その責任感の強さには大変心を引かされました。

私と飯島さんの子供同士が大変な仲良しのため家族ぐるみ親しくさせて頂いておりました。その様な飯島さんはロータリーを楽しみ乍ら過ごされましたが、もう少し手抜きをされたらと悔やまれます。

今は飯島様亡きあとも甲府クラブ140名のロータリアンが飯島さんの作詩作曲による甲府ロータリーの歌を毎月毎月唱い世界が平和であると共に唱い続けられる事でしょう。

道拓建設株式会社

代表取締役　横　溝　一　二

甲府市国母一丁目23－7
TEL(0552)22－5785
FAX(0552)22－5713

おしい先輩を失って

梨響顧問
小　川　昭　夫

去る３月21日、バイオリンの窪田先生より飯島先生がお逝りになったとの連絡を受け、一瞬愕然といたしました。

私自身、日頃先生を敬愛し、かつ限りないご指導とご厚情を頂いておりましただけに、心のいたむ想いでした。

故人である先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

先生は、その端正なお顔から想像も出来ないくらい音楽に対するはげしい情熱と気迫を持っておられましたが、その面影が昨日のように目に浮んでまいります。

先生とは昭和30年、ＪＯＫＧの管弦楽団の指揮をなされた頃からのご縁で、アンサンブル・ラ・セーヌ、プリモ室内合奏団、山梨交響楽団、日本弦楽指導者協会などの関係で40数年のおつき合いをさせて頂きました。

そのなかで、とくにご尽力を頂いたのは、山梨交響楽団（通称梨響）を通してのオーケストラ活動であったと思っております。

昭和48年10月、県内の音楽愛好家によって設立されたオーケストラ「山梨交響楽団」が翌年３月第１回の定期演奏会を行い、産声をあげたわけでありますが、この設立に関しても先生に数多くのお力ぞえを頂いておりました。私も梨響の音楽活動を続けるなかで、事務局長、コンサートマスター、団長、顧問と歴任をいたしてまいりましたが、そのおつき合いで、先生は梨響の年１回の定期演奏会を第１回からお体の具合が悪くなられるまでの間一回も休まず演奏を聞いて下さっておりました。いつも演奏終了後舞台裏にお見えになり、お世辞のない、心からのご批評を頂きましたが、これが私どもにとってかけがえのない指針と財産になったと受けとめておりました。

いくつかのご批評を頂いたなかで、とくに印象にのこっていることを紹介させて頂きますが、第４回目の定期演奏会の時、「あまり大曲に取り組むな」やさしい曲でも良い演奏をするようにと仰ったことがありました。

梨響のビジョンである県民の手による県民のためのオーケストラとしての活動を忘れずに、常に県民の皆さんの心から遊離しないようにとの先生の親心であったのだと思いました。先生は常に紳士であり、梨響は勿論、県内の音楽界の動向にもいつも変らず公平の立場でご指摘、ご発言を頂いていたこと、このかけ値のないご指導が私どもの音楽活動のひとつの支えになっていたことに、今更ながら感謝の気持ちがわいてまいります。

先生の想い出はとても言いつくせませんが、私自身、先生が身をもってお示しいただいた音楽に接する心を、大切に育て、これからの人生に役立ててまいりたいと思います。

おわりに先生のご家族の皆様のご健康と幸せをお祈り申し上げ、想い出のことばといたします。

民間音楽に生涯を捧げた飯島國男～50年前の氏の論文に接して～

渡　辺　経　三

「音楽とは何か。他人に感動を与えるほど巧みに音楽を奏する力は、神が20億の人類のうち何千人かに限って賦与し給うた不可思議な才能である。然し音楽を聞いて楽しむことは万人に与えられた平等な賜物である。権利である。慰安である。この尊い精神的な領域を忘れて事業や学究

ばかりに熱中することは如何に哀れな一生であろう。」

これは昭和17年に発行された甲府商業学校校友会誌「商友」に飯島國男が「音楽の重要性」と題して寄稿した論文の書き出しである。このあと彼は「音楽もただ耳だけで聞いたのでは理解することができない。茶摘女の鄙歌は村中同じ節で同じような歌詞を謡うけれども、その女の心的状態と環境によって悲しくも、おかしくも聞こえるのである。まして近代の音楽は一世紀に数人しか生れ出てこない巨人等が涙と魂をこめて肺腑から絞り出した呻吟である。ぼんやり耳をたてたところで理解し得られる筈がない。音楽を聴くことは全人格の活動なのである」と音楽の芸術性を力説する。

更に彼は音楽の目的、音楽の鑑賞について論理を展開したあと次のように言っている。

「今の世の人々、残念なことには日本人の中で文明国人と呼ばれながら“音楽が何だ”“音楽がなくても世の中は渡れるぞ”“音楽は戦争に何の役にも立たない”等と罵言を飛ばす人々がいる。音楽が吾々の心を和らげてくれ、人心改善の作用をなすからには音楽が役に立たぬとは言えない筈である。これによって音楽の作用は偉大なものと感ぜざるを得ない。」これは、時あだかも太平洋戦争開戦直後の頃、全国が戦争一色にぬりつぶされ、音楽が踏みつぶされてしまうのではという危機感を感じた16歳の少年飯島の必死の叫びではなかったろうか。

ここで彼は「戦争と音楽」について、当時の大本営海軍報道部平出大佐の「音楽は軍需品なり」の発言を引用したあと「軍は今日各軍楽隊を持っているが、是は必要があるから有るのであって、音楽は偏えに優柔不断であるといった考え方は誤っているのである」と断言したあと「最近国民歌謡等音楽が一般化し、音楽の真価が次第に理解されるようになったことは喜ぶべきことである。音楽がこの世知辛い世の中の荒波に抵抗して発展してきたのも、余程重要なものであるからではないだろうか」とほっと胸をなでおろしてこの論文をまとめている。

同級生である飯島君の偉業を偲ぼうとしている時私はふと書棚から50年前のこの論文を発見した。何度も読めば読むほど彼の音楽に対する情熱に圧倒され、16才の少年が当時このような迫力のある論文を書いたことに只々驚くばかりであった。当時彼は甲商音楽部のキャプテンとしてその先頭に立っていた。音楽を守り、民間音楽のために生き抜いた彼の生涯はこの時すでに決まっていたのではないだろうか。

当時甲府商業では毎年春秋２回、弁論大会と一緒ではあったが校内音楽大会が開催されていた。先生も生徒もみんなで一日音楽を楽しむのである。今にして思えばあの戦時中にこれを継続し通した彼たちの苦労がうかがえる気がする。彼が指揮する甲商ブラスバンドが全校の分列行進の先頭に立ったのも当時音楽を守るための彼の必死の斗いではなかったろうか。

戦前戦後を通して音楽を守り、民間音楽のためにその全生涯を捧げた偉大なる友、わが敬愛する飯島國男氏のご冥福をお祈り申し上げ筆をおきます。

思出は尽きず

若尾バレエ学園
若　尾　多　香

「若尾さんの顔をみてもドキドキしないんだよ。何時も鼓動が同じなんだ」といくらか白くなった顔が明るかったのに、その國男さんの想い出を書くことになろうとは、その時でさえ、夢にも思いませんでした。何から書こうかと思い出をまとめようとすると次々に湧いてくる思いに仲々ペンが進まないのです。

オリオン通りに巾一間位のごちゃごちゃと楽器が置かれていた小さなお店の頃、音楽好きの青年達が何時も屯して戦後の街に夢を売っていました。私などその楽しい仲間がうらやましくて、仲間にやっと入れてもらったものです。その頃の國男さんはハンサムで独身、青春を謳歌、やがてご一緒の仕事も始まり、初めての仕事は彼の指揮するオーケストラでブラームスの「ハンガリヤ舞曲第五番」で、私が踊りました。巡回公演ではアンサンブル・ラ・セーヌのメンバーと共に県内を移動公演、教壇をつなぎ合せた小さな舞台で、白鳥やショパンを踊り、時には下に落ちてしまったりで、テレビの普及しない頃の遠い思い出となりました。

そして何時の頃からか梅子夫人が側にいて、一粒種の慶子さんの可愛いい姿がバレエ教室にみえるようになり、バレエ音楽にも多くのご協力を頂いたり、教えても頂きました。

子供の為の曲では、「わんわん物語」「ピーターパン」でとくに「ピーターパン」は55分の大作で全曲をマンドリンの合奏の中から選曲して下さり、舞台装置は東宝舞台の第一人者の鈴木稔さんとベテランのスタッフにより見応えのある作品に、県民会館のあまり機能的でない舞台を精一杯動かしたものでした。

何かと云っては飛んで行って選曲や録音していただきました。立派な音響装置をお持ちでついに譲っていただいたスピーカーは今もバレエ学園の音楽室で美しい音楽に酔わせてくれています。

最后の舞台は89年の第39回山梨県芸術祭に制作した「タンゴ・エル・コンパルサ」です。

タンゴでバレエを作りたいと思った瞬間、國男さんの顔が目の前にあり、大手の音響室に向い合っていました。梅子夫人の煎れて下さる香り高いコーヒーをいただきながら場面や情景を話し、決められた時間内での選曲をお願いしました。二週間の後とどけられた数曲のタンゴに心躍り振り付けも進みました。南米の小さな港町の夕暮れに出会う男と女の小さなお話、ついに私も出演者の仲間に入り、ゲストの男性もそろって、いよいよゲネプロの日、舞台袖に彼の姿がみえました。彼の大切なコレクションの朝顔型のスピーカーのついた蓄音機を実際に舞台で使ってはとの意見、音響の方々の協力を得て実現したのです。どうしたら最高の作品が出来るか、彼の精神はまさに芸術家の魂に満ちていました。

梅子夫人の熱い看病も、友人達の願いもむなしく旅立ってしまった國男さん、旅立ちの日の早いのを知っていたかのように「若尾さん、これはすてきな美しい曲を集めておいたから」とマンドリン合奏のテープを頂いてきました。何時か必ず踊りにします。天国から見守って下さい。

合掌

パラダイスマンドリントリオ

山　田　耕　作

「山田さん、これがシューベルトが弾いていたといわれるギターですよ」「すごい。じゃシューベルトは、このギターで、あのシューベルトのセレナーデを作曲したんですね」

飯島先生は、比留間賢八生誕120年記念演奏会の打ち合わせのために甲府に訪れた私に、「ぜひ音楽資料館を見てください」と、にこにこしながら珍しい、たくさんの楽器を見せてくださいました。

飯島先生が編集された同演奏会のプログラムは、比留間賢八先生の古い写真や資料が満載された実に立派なものでした。私たちの練習も熱心に御指導くだされ、おかげさまで武蔵野市民文化会館大ホールで開かれた演奏会も大成功をおさめることができました。当日の先生のダイナミッ

クな指揮は今もまぶたに焼きついています。

今、私の手元に１枚の古いプログラムがあります。それは35年前の昭和31年９月に、山形県立米沢興譲館高等学校から招かれて比留間マンドリン・アンサンブルが演奏会を開いたときのプログラムです。そのメンバー紹介のところに、第一マンドリン飯島國男、ギター一瀬純一とあり、そして第二マンドリンのビリに山田耕作と私の名前が載っています。初めて飯島先生と御一緒に弾いた組曲「山の印象」や、一瀬先生のギターソロ、「禁じられた遊び」や「第三の男」など、今もありありと思い出せます。

飯島先生の無二の親友であったその一瀬純一先生も早くして亡くなられ、飯島先生はとても悲しんでおられました。そして今、先生も天国に行かれてしまいました。これからというときに、まことに残念でなりません。

しかし、今ごろは天国で飯島先生のマンドリンと一瀬先生のギターで二重奏を楽しんでおられることでしょう。私も近いうちに天国に行って、及ばずながら第二マンドリンを弾かせていただきます。名前は飯島國男とパラダイス・マンドリン・トリオはどうでしょうか。もっとも私が天国に行けたらの話なので、ぜひ行けるように神さまに頼んでおいていただけませんか。飯島先生、お願いします。

飯島先生とＯＳＴ

オルケストラ　シンフォニカ東京
代表幹事　今　津　　章

飯島先生とＯＳＴ（オルケストラ　シンフォニカ　東京）との関わりは、昨年の５月から10月迄の僅か６ヶ月にすぎませんが、先生の包容力のある暖かい人柄と、音楽性豊かでプレクトラムに精通された的確なご指導に、メンバー一同は知らぬ間に、思わず引き込まれて行きました。「音楽は呼吸するもの」とのお言葉は特に印象的で、今ではＯＳＴの演奏の基本となっております。

思えば、1987年７月比留間賢八生誕120年記念演奏会後のパーティで、「ＯＳＴを指揮してみたい」と先生が言われたことを、伝え聞くに及び、願ってもないことと、この時より、指揮者としてお迎えできる日が来ることを、待つこととなりました。

1989年秋、漸く待望の機が熟し、先生もその著書「比留間賢八の生涯」の発行に際し、お気持を固められた様で、この年の11月ＯＳＴ正会員として入会されました。（この著書の作者の経歴には、ＯＳＴ会員と書かれております。）

当時、先生には既に体調を崩され、回復に専念されることと、期の途中からの指揮は万全を期し難いとのことで、翌90年５月の新年度からの指揮を約束され、３年がかりで漸く飯島先生指揮のＯＳＴが実現した訳であります。

５月からは、甲府から奥様運転の車で杉並まで、毎月１回の練習に参加して下さいました。奏者とのコミュニケイションを大切にされ、「曲を通じて話し合いたい。その為に難しい曲を選んだ」と言われ「交響的前奏曲」（ボッタキアーリ）「エカーヴの嘆き」（ラウダス）を持って来られました。

先生のタクトは、奏者を統御するものでなく、奏者より良い音を引き出す為にある様に思われました。

「今後の音楽生命をＯＳＴの指揮にかける。」と言われ病を押して指揮台に立たれ、吾々を指導された飯島先生に、是非４月の定演での指揮を……と最後まで望みを托しておりましたが、無念

にも先立たれてしまわれました。定演での「エカーヴの嘆き」は異様な雰囲気で、皆憑かれた様に弾き始め、「これは飯島先生が来て居られる」と感じながら終曲を迎えました。

飯島先生、これからもＯＳＴに来て下さい。

ＯＳＴは先生の教えを決して忘れずに、格調の高い音楽を作って行きます。……と心に誓いながら、今は只先生のご冥福をお祈り申し上げるのみです。

飯島先生と梨大マンクラの出会い

小　林　伸　吾

昭和36年、梨大に入学間もない５月、日本大学マンドリンクラブの演奏会を県民会館大ホールで聞くことになった。

約100名のマンドリンオーケストラの演奏は「ペルシャの市場より」で始まった。指揮者のタクトが振り下ろされた瞬間から僕の体は身震いがし、鳥肌立つ興奮におそわれ、アンコール曲の「アデュー」が終って終演となっても席を立つ気になれなかった。その時、梨大にマンドリンクラブを作る事を決意した。

精密工学科の仲間９名を誘い、やっと11月３日、ささやかな創立式を行ないマンドリン７名、ギター３名でのスタートとなった。

全員楽器を持つのは生まれてはじめての集団、夫々マンドリンとギターの教則本をたよりの練習がはじまった。こんなことであの日大マンドリンクラブのようになれるのか、誰か指導者を得なければ無理であることに１ヶ月もしないうちにたどりついた。「誰かいないものか。」「このままでは早晩空中分解してしまう。」そんな不安と焦燥感が極度に高まってきた１月の中旬、ぱっと思い出した事があった。

新鮮特急
海産物・鮮魚・活魚 卸
鮮度を運ぶ流通技術の明日をめざして

ミナヨ

甲府市国母６－６－６　㈱湊與
ＴＥＬ 0552(26)３７４２㈹

手造りのぬくもりが伝わる老舗の味
みな与の煮貝

煮貝の元祖 創業400年
みな与
甲府市中央３－11－20
ＴＥＬ0552－35－3515

追悼の言葉

確か中学１年生の時、学校全体で映画鑑賞が行なわれた。題名は「野菊の如き君なりき」であった。そのバックミュージックがギターとマンドリンで奏でられ純愛物語を非常に効果的に盛り上げていた。我が担任は梨大を卒業したばかりの先生で、甲府から通勤しており、「この映画のバックミュージックは甲府の楽器店の御主人が弾いているのだよ」と誇らしげに言われた事を思い出した。そこで早速、甲府の楽器店を駅前から順次訪ねて歩き３～４軒目で遂に飯島先生とお会いする事ができた。

第一印象は、「清潔」「上品」このような紳士にかって出合った事がなかった。

「是非指導して下さい。」一途な願いに先生は心良く承諾して下さり、毎週水曜日午後３時から指導して頂くことになった。あの時の嬉しさは、今でも強烈に思い出される。最初の御指導にこられた時に我々はマンドリンとギターで教則本にあった「ドナウ川のさざ波」「灯」を一生懸命に弾いた。先生はニコニコして聞いてくれ特別何も言わずに帰っていった。我々はあまりにもひどい演奏なので見捨てられてしまったのではないか、もう来週は来てくれないのではないか、との不安を持ちつゝ次の水曜日を待った。３時ちょっと過ぎた頃先生は大きな荷物を持って、ちょっとはにかむようにニコニコしながら来てくれた。荷物の中味は大きなマンドリン（マンドラ）とテープレコーダで、その日は飯島マンドリンカルテットがＮＨＫで放送された「トセリのセレナーデ」他を聞かせてくれカルテットの楽符とカラチェのマンドラを貸してくれた。

今回は紙面の都合で先生と梨大マンドリンクラブの関わり合いのスタートの部分までしか記すことが出来ず残念であるが又の機会にもっと多くの事を偲ぶ機会のある事を念じつゝ合掌。